

「岐阜人」は、こが岐阜を愛し、岐阜とのかかわりを持ち、岐阜を楽しく創って見ている人たちの総合雑誌です。

創刊記念特別号  
特集●岐阜の在住外国人事情

岐阜の在住外国人  
座談会  
外国人の暮らしが  
どう変わったか  
わが母を語る

座談会  
座長 山岸 浩  
参加者 渡辺 謙  
岩本 哲也

マツダの社長  
山岸 浩  
山岸 浩  
山岸 浩

岐阜の創造精神  
坪内逍遙と写実

岐阜スケッチブック  
長良川の思い出

ひと 野田 浩  
紅谷 与一

岐阜の歴史  
モンネアザガハ  
名和孝雄

国際交流対談  
ローデリック  
フライド

ぼくの好きな岐阜人  
写真  
木下好枝

岐阜の達人たち  
岐阜の歴史  
河村 敏

市の風貌  
高山の朝市

村しばい人物記  
岐阜舞伎保存会  
杉山 浩二

岐阜の人  
福島初栄

伝統の伝承者  
宮本 志多良雄

新刊  
高畑温泉

社会・文化・スポーツ経営の発展機関

むらしばい人物記 (その一)

佐見歌舞伎保存会  
杉山浩二さんへ上

写真・文  
鈴木修治 (ルポライター)

「熱意でもって、ようやくここまでできました。準備についてやした五年間をふりかえりながら杉山浩二さんはそう語った。熱意でもって、という言葉の中に、それまでの苦労がすべて表現されていた。

熱意以外にもなにもなかった。資金はなかった。芝居小屋は台風で壊されてなくなっていた。歌舞伎の小道具につかう拍子木ひとつなかった。仲違いから保存会のメンバーがいなくなってしまったこともあった。杉山さんは、しかし佐見歌舞伎の復活をあきらめなかった。

一九九一年四月、加茂郡白川町佐見で、三十七年ぶりに地歌舞伎が復活した。ほとんどゼロからの再出発で、復活までの道程はたいへんなものだった。復活の立役者となった杉山さんから話を聞きながら、私は彼の情熱に心打たれた。なにが彼をそこまで動かしたのでろう。そして取材をしていくうちにやがて気がついた。彼を動かしたのは、ふるさと佐見への熱い思いだった。

佐見で歌舞伎の復活をという話がされ出したのはいまから五年ほど前のことだ。五十歳を過ぎ、子どもも仕事について「心の中にゆとりができた」同年代

私は地歌舞伎にくわしいある保存会の人の言葉を思い出す。「いっぺん切れたら、えらいこと」と、その人は言った。地歌舞伎を継承していくのに一人でも昔の経験者がいればいいが、一人もいなくなってしまうと

ら、一度途絶えた地歌舞伎を復活させることは至難の技だということだ。杉山さんは、やがて舞台に立つメンバーの中でたった一人の経験者だった。やがて杉山さんたちは、金山町の市川福升師匠のところへ相

談に行く。「拍子木もないことではあかん」という話になるが、とにかく情熱があればできるぞとほげまされ、佐見歌舞伎復活にむけて動きだす。ところが師匠と契約をして本格的にはじめようというところへきて、脱落者があらわれた。興行規模の大きさに弱気になってしまい、グループから抜け出ってしまったのだ。



「一番最初に言いだした人が、歌舞伎なんかやったら三百万

ぐらいいまでへってしまう。窮乏らしいにまでへってしまう。窮

のころ奥さんにこんな話をして

